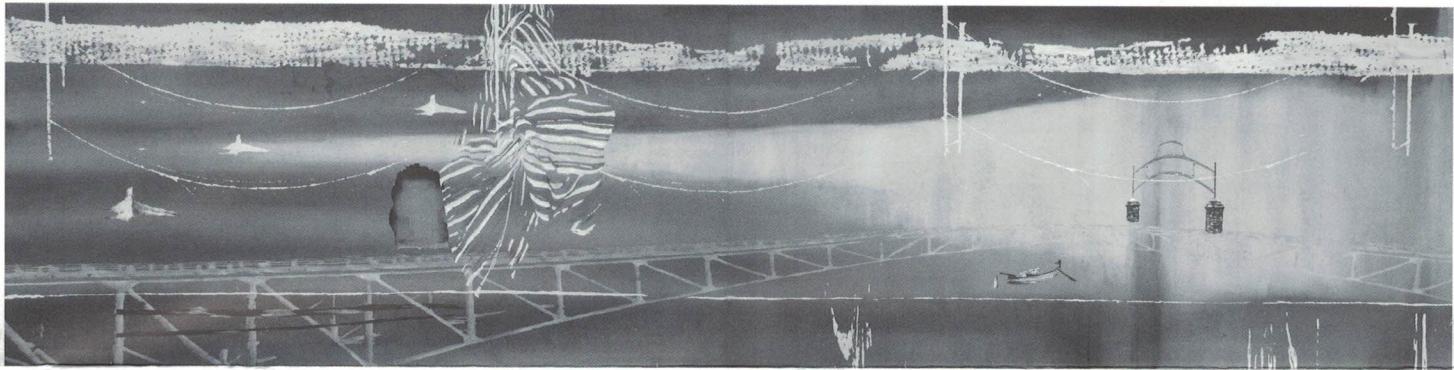


NUA PRESS

VOCA展2013奨励賞を受賞!!

柴田 麻衣さん (30期卒 絵画科版画コース)

2014 no.21



—2013年VOCA展奨励賞受賞おめでとうございます。少し絵のスタイルが変化し始めた時期に受賞されて、新しいチャレンジが実を結んだ、そう思える様な嬉しい出来事でしたね。

透明な複数層から成る支持体の作品を開させていくうちに、植物を通して見える心象風景というテーマよりも、異質な素材感や光と影のあり方を追求していく方向性が強くなってきました。しかし、私の表現と異なる気がして、このズレを抱えながら今後展開していくことに迷いがありました。また、それらの作品を制作している間に、そのコンセプトとは別の思考が充実してきて、そこに目を向けた表現の方が魅力を感じたのです。それが変化の動機です。そのため、一度初心に返り、紙と絵の具というシンプルな素材で私は何を見せることが出来るかということを試そうと思いました。

—大学では版画を学ばれてきたわけですが、その経験が作品づくりに影響されているのが判ります。やはりペインティングとなっても版画制作でのプロセスなどに近い感覚ですか?

はい、私は版画を始める前ペインティングをやっていましたが、私が未熟であったこともあります。終わりにはっきりしないやり取りの連続にストレスを感じていました。版画を始めたとき、完成段階を見越した逆算の作業をしなければならなかったのですが、その作業は私にとってとても自然に感じました。現在作っている作品もそういった版画制作のプロセスを活かしています。アウトライナをあえて明確にしたり、作品にレイヤーを用いるなど、版画制作から得たものがペインティングにも表されていると思います。

—昨年夏のギャラリー芽楽(名古屋)での個展に寄せたコメントに、「一つの風景には、沢山の事象が含まれて～中略～人々に影響を及ぼします。そんな風景を眺め、感じ、自らの表現として創造し

ていくこと。それは私にとって大切な行為」とありました。

ひとつの風景の中には、沢山の人々の物語が刻まれていると私は感じます。

世界遺産や遺跡などは顕著な例だと思います。私はそういった風景が持つ背景を捉え、模索しています。その背景には輝かしいことだけではなく、悲しい事実も数多くあります。そのような暗部に対し、人はどう捉え対峙していくのか、その作用に私は興味をそそられます。また、そのとき、人の精神は特有の美しさを放つ気がします。その美しさを思い、風景を私自身の中に映し出し、色を付け、層を作り、画面に起こしていく行為を続けていると、自分の心の深淵のような部分に、静かに、そして、ひしひしと、何ともいえない強靭な力がもたらされます。その力によって自分が動かされ制作意欲を駆り立てられている気もありますし、更なる表現へ向かう源にもなってくれています。

また、現在、制作空間に入ると、そこには作品から発生する独特的な空気が漂っています。それは、雑多な日常から切り離されたものであり、私はそこに身を置くことにより、気持ちが落ちつき、穏やかに冷静になっていきます。日常と制作空間を行き来することによって良いバランスが保たれているのだと思います。

—'12年の海外レジデンス報告展ではご主人やご家族もお見えになっていて、微笑ましい限りでした。

主人も家族も基本的には応援してくれています。でも、親には大学を卒業してからずっと、いつまでお金にもならないそんなことを続けています。最近はあまり言われません。

—そんな柴田さんも、今は講師として後輩を教えてらっしゃるお立場ですね。

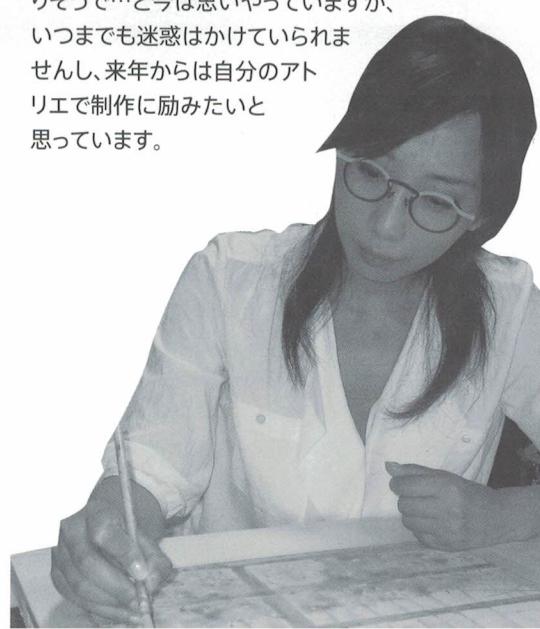
学生のうちには周囲と比較をせずに、自分を信じて表現してほしいです。それぞれに、個性があり向き不向きはあるので、劣等感をバネに奮起するのならばいいですが、それに押しつぶされたり、制作に向かう気持ちが失せてしまうのはもったいない。また、何か掴めるものがないと、つまらない言葉で傷ついて登校するのが嫌になってしまいます。

私は、どんな学生でも、きっと自分に素直で自然なことが表現に繋がれば、熱中できると思います。そのためにも、自分のどこかを好きになってそれを伸ばしてほしいです。

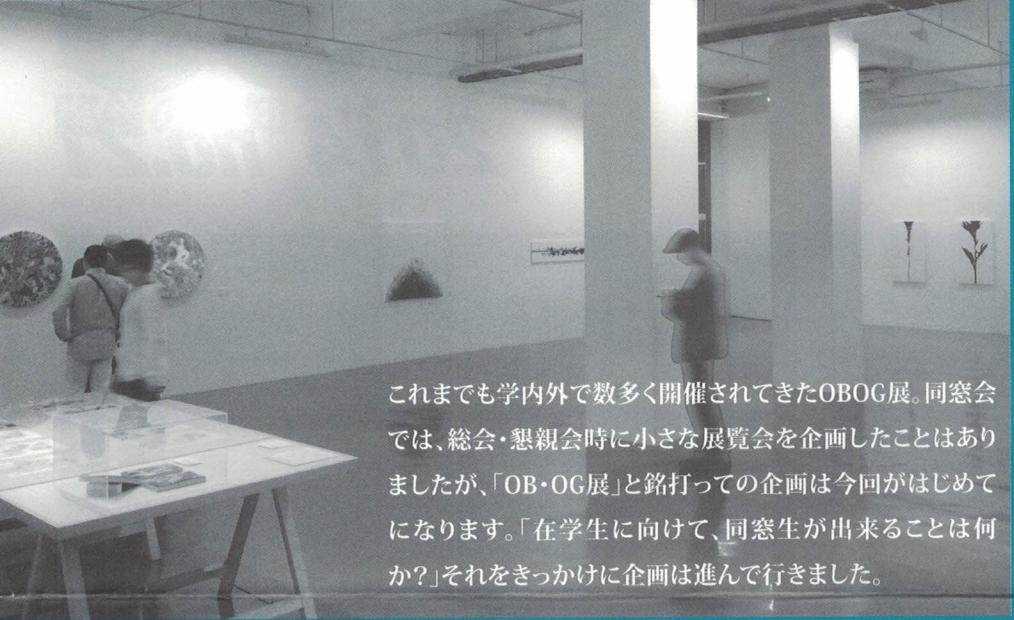
そういう糸口を見つけるために、教えることを通じて、何かしらの力を貸してあげることができればなと思っています。

—これから発表予定を教えてください。

個展が名古屋で11月、大阪で来年の2月にあります。制作は大型作品を描き始めてから、実家の和室で作業しています。色々規制があり不自由ではあります。ただあまりにもやりたい放題では、制作することへの貴重さが感じられなくなりそうで…と今は思いやっていますが、いつまでも迷惑はかけていられませんし、来年からは自分のアトリエで制作に励みたいと思っています。



「OB・OG展」を開催しました!



これまで学内外で数多く開催されてきたOBOG展。同窓会では、総会・懇親会時に小さな展覧会を企画したことはありました。しかし、「OB・OG展」と銘打つ企画は今回がはじめてになります。「在学生に向けて、同窓生が出来ることは何か?」それをきっかけに企画は進んで行きました。

同窓会として、同窓生・在校生の皆さんのお役に立てる事はないかと考え、多彩な領域で活躍している同窓生をピックアップし、学生の皆さんにクリエイティウな活動を将来見据える上で刺激となる展覧会を設けたいという目的で企画したのが、この展覧会です。会期は2週間、前後期に分けて7名の作家の作品を展示しました。

前期は中島弘敬さん(デザイン4期卒)のデザイン画、川田英二さん(版画22期卒)の銅版画、村松陵子さん(日本画23期卒)の漫画原稿、和田唯奈さん(洋画40期卒)の平面作品が展示され、後期は佐久間要さん(洋画22期卒)のインスタレーションに、荒木由香里さん(彫刻32期卒)の彫刻作品、まり木綿(デザイン38期卒、伊藤木綿さん/村口実梨さん)による、てぬぐいや足袋などが展示されました。

展覧会のオープニングでは、学長はじめ多くの先生方、学生の皆さんに参加して頂き、大変有意義な時間となりました。アーティストトークも行われ、興味のある作家と話す機会もでき、在校生と同窓生を直接つなげる良いきっかけになったと思われます。

同窓会主催の展覧会は今回が初めてで、役員の中で対象作家を選抜し、新作だけでなく過去の作品も含めて展示しました。選抜する作家についてご意見ご要望があれば、事務局までご連絡をお待ちしています。

出展いただいた同窓生の方々にはお忙しい中今回の趣旨にご賛同頂き、搬入出、オープニングなど自らご協力いただき感謝しています。ありがとうございました。今後も毎年開催できるよう、尽力して行きますのでよろしくお願ひいたします。

青木高弘

(名古屋芸術大学美術・デザイン学部同窓会 会長)



前年までのOBOG展とは展示体制がガラッと変わり、各展示が充実した内容になったと思います。一人当たりのスペースが増えたことで、作品量の増加はもちろん、割り当てられたスペースをどのように有効活用するかという課題もできるので、展示する側としても張り合いました。

パーティでの作家トークでは、まり木綿の活動を軽くですがご覧できたのもよかったです。また私個人的には、他の作家さんのお話が聞けて貴重な時間でした。

ただ交流という面については、思ったより時間を取れませんでしたが、今工場に作業のお手伝いぎてもらっているのは、このときちょうどお話をできたテキスタイルの後輩になります。このような繋がりができるのは、こういった機会を持てたからこそだと思いますし、とてもうれしいことです。

もう少し展示期間をいただければ、ゆとりを持って見ていただきながら、他の作家さんや学生との交流がもう少しとれるのではないかと思いました。

今後もOBOG展を続けて行くのであれば、今回のような少人数、選出型のスタイルはいいと思います。やはり2週間ほどの展示期間があると嬉しいですね。また展示会場については、大学ギャラリーだけでなく、名古屋市内のギャラリーや展示施設で開催しても、また雰囲気が変わっていいのではないでしょうか。

今回、ギャラリーの自然光が入るラウンジでの展示でしたので、まり木綿のカラフルで賑やかな印象がより伝えることができたと思います。ただ私たちの展示物は、お店でも販売している「商品」があるので、ご覧になった方がお手元でも楽しんでいただけるよう、販売体制がとれれば尚良かったと思います。

最後に、卒業後クリエイター活動されている方は多く見えますが、その中でもまり木綿を選んでいただけて嬉しく思います。ありがとうございました。



名古屋芸術大学 空手道部 OB、OG展 2014.11.14-18

押忍!!

この度、空手部卒業生による
グループ展を開催いたします。

■会場

名古屋芸術大学アートスペース
T.A.G. IZUTO

名古屋市中区錦3丁目13-33
いづとうビル2F

■会期

2014.11.14(金)～18(火)

■開館時間 11:00～18:00

※16日(日)は、同窓会の総会懇親会開催日です。参加される前後にギャラリーにもお立ち寄りいただけましたら幸いです。

◆出場選手 ※()内数字は卒業期

- 花田 俊彦(5期)
- 八神 雅久(8期)
- 甲斐 貴志夫(9期)
- 鳥井 仁史(10期)
- 阪上 一男(11期)
- 村上 典子(11期)
- 土門 正佳(13期)
- 古道谷 朝生(16期)
- 原 邦恭(17期)
- 白石 裕貴(18期)
- 平田 隆宏(19期)
- 川田 英二(22期)

★特別出場

- 原田 久
- 田口 貴久
- 杉浦 尚史

綿さんに聞いたこと、そしてこれから?!



展示作業中の
村口実梨さん(まり木綿)



上の写真撮影=怡士鉄夫



展覧会初日には、アーティストトークを開催。卒業後から今まで具体的にどのような行動を起こしていくのかなど、在校生に向けてリアルな内容を語ってくれた。



作品展示中の荒木由香里さん

当日トークしてくださったアーティスト:
天野智恵子さん(川田さん・荒木さん代理、取り扱いギャラリーオーナー)、村松陵子さん、伊藤木綿さん(まり木綿)、佐久間要さん。



スタッフと打ち合わせ中の
佐久間要さん。

同窓会主催でのOB・OG展は今回が初めてのため、選考、作品搬入、展示、案内など手探りのことが多く、選出させていただいた作家の方々、大学およびギャラリー関係の皆様方には大変ご迷惑をおかけしました。皆様の温かいご支援、ご協力により無事に開催することができました。心より感謝しております。ありがとうございました。

搬入搬出時は、在学生にアルバイトをお願いしたのですが、作家と直接コミュニケーションをとりながら、展示や撤去のサポートをすることとなりました。緊張感の続く中、彼・彼女らにとって、とても貴重な経験だったと思います。

また展示作品は、ペインティング、版

画、彫刻、インスタレーションなど多岐にわたり、来場した学生たちには良い刺激になっていたようです。オープニングの日に先生方とお話の中で、選考基準が学内だけの意見とはまた違った視点で面白いとのコメントをいただき、この展覧会の趣旨を反映できていると実感しました。

また今回の展示では、作品の搬送から展示・搬出までも同窓会が担当いたしました。作家との直接受け渡しのためアトリエを訪ねたり、ギャラリーを訪ねたりと、普段ではできない経験をさせていただきました。その中で、時間調整がつかず、ご迷惑をおかけする場面もあり、我々としても反省すべき点も多々ありました。

また今回、できるだけ多くのジャンル(専攻)の作品を観て頂けるよう選出しましたが、今後は作家あたりの展示規模を広げるために、人数を抑えた構成にしていこうと検討中です。

これからも、卒業後活動を続けていらっしゃる、20代、30代のクリエーターの方々を中心に、このOB・OG展を続けていきたいと考えております。

(OBOG展運営委員会 鎌田桂太郎)



上の写真撮影=怡士鉄夫

実験を繰り返して立ち上がる、その先へ。

田中 翔貴さん

デザイン科36期卒

今年に入り、文化フォーラム春日井(春日井市)、織部亭(一宮市・レストラン&ギャラリー)と、発表を行った田中翔貴さん。展覧会での作品を中心にお話を伺いました。

——先日二つの田中さんの展示を拝見させていただきました。展覧会DM(ダイレクトメール=案内)に惹かれて絶対見に行こう!と思って見に行つたのですが、どちらも想像していた以上に迫力ある作品でした。

まず、春日井文化フォーラムからお話をしたいと思います。木の写真作品、3.6×2.5メートルという、とても大きなサイズでプリントされていました。それがドーン!とホールのど真ん中にあって、作品の前に立ったとき、一人で森の中にいるような、ぞわぞわと落ち着かない気持ちになったんです。他には水晶を撮影したことがかろうじて判る写真や、何の像か判らない銀色がテラテラとただ光っているような作品がありました。普通なら写真作品といえば、像が何なのかが判るほどには写っていて、それがダイレクトに力強く訴えてくるものなのですが、田中さんの作品は「そこに物質がある」というような印象をうけます。

作品の物質感については制作において"写真そのもの"に重点をおいていたからだと思います。私が扱う写真は化学反応を用いたもので完

全に制御する事は出来ません。現像、プリントの際の温度や湿度、様々な環境条件が制作に影響を与えて左右しています。

作品の制作に人知を超えたものと化学的なモノを含むことで現れる写真の実体に写真表現の新たな可能性を探しているのです。

——なるほど、そういう表現方法から私は素材感を感じたようですね。そこに存在しているという作品の魅了されました。

田中さんを知ったのはつい半年前のことですが、最初の印象は温和な方だなということ、そしてきっと作品も柔らかい感じの作品なのだろうな、と思っていた。ところが文化フォーラムの作品を拝見して、想像していた作品と反対の力強い作品で驚きました。何か影響を受けた作品やアーティストってあるんですか?

マーク・ボズウイック(Mark Borthwick)という作家です。マークは"写真家"で、様々なアートプットをもち、ファッション写真・映像・インスタレーション・詩・音楽など幅広く世界で活躍しているアーティストです。雑誌パープル(フランスのファッション紙。<http://purple.fr>)を始め多くの書籍にも彼の写真が起用されています。彼に出会ったことが一番大きいと思います。

——出会ったというと、機会があったのですか?

僕が大学3年生のときに「あいちトリエンナーレ2010」の招待作家として来日し、長者町会場での展示アシスタントをさせてもらつたんです。

——この方、日本語は…?!

《おとした輝き》 794×687mm アートエマルジョンプリント 2013年

いいえ。(笑)

——言葉でコミュニケーション取れないって、恐くはありませんでした?

いや、でも尊敬している方だったから。作品集も持つて。そしたらタイミング良くトリエンナーレ來ることになって。

——この人の作品のどんなところに惹かれたんですか?

彼が撮ってる写真は本人の生活自体というか、家族や友人、仕事仲間など身近な一瞬の記録で、それを彼が撮るととても美しい世界になるんです。主に人物を写しているけど身の回りの生活で写真家として作品を作り、またそれが仕事としても成り立っている。それだけではないと解っているけど単純にその時の僕はそれができていて素晴らしい写真と展示を生み出す彼のことがすごい!って思ったんです。

——マークさんの作品は、平面の写真と草とか植木鉢の実物が組み合わさっているところから、物質的な素材に対しての意識を感じるんですが、田中さんの作品も同じように物質的な意識を強く感じます。写ってる像はわからないけど銀が反応して写真が出来てるっていう感じとか。こういう作風についていつ頃からなんですか?

最近ですよ、院の卒制のちょっと前くらいからです。マークの展示って額にあまり入れなくつて、ベタ張りとか、そのまま置きとか、ちっちゃいのも大きいのも。さらに本とか映像とか、いろんなメディアに移行するんです。そこがすごい魅力的で、やはり生活が垣間見えるんです。僕の場合生活ではないけれど写真を作る環境は意識して作品にしています。だから写真だけにならないと思うんです。

——ところで、田中さんはなぜ写真という表現方法を選ばれたんですか?

《木》 3600×2500mm アートエマルジョンプリント 2014

子どもとともに 海賊船で今を航海する

大路 宗規さん
彫刻科22期卒

実験が好きだからです。写真からは化学変化を身近な所で感じることができ、行程や条件により目に見える変化が魅力と感じました。筆ではなくカメラが性に合ったのも一つの大きな要因です。

——最近の個展で感じたこと、手応えについてはいかがでしたか？

どちらも空間を意識して作品を制作しました。作品に展示箇所の魅力をプラスする事を考え展示したので制作の方向性は同じでも会場によっての作品の見え方の違いを大きく感じました。

——なるほど、場所を生かすということは展示方法で絶対に必要だと私も思います。でもそれってみんなやってることですよね。

頭の中で作品を展示した状態で会場を透明にして、3Dのように作品だけを残しちゃって、気持ちのよい展示が一つで来た事が今後の空間意識に繋がると思います。最近は空間が面白い場所で展示をさせてもらったので、何も無い白い空間で展示発表をしてみたいですね。

——最近発表された場はその場所自体が力強いところでしたね。春日井文化フォーラムの大きな壁一面がホールに用意されているところや、織部亭はレンガとコンクリートの空間だったり。これからも作品を通してピュアに意識して伝えたいことってありますか？

具体的なものでなくとも良いんですが、だれかに何かを教える事が出来る作家になりたいです。難しく聞こえてしまった部分もあるだろうけど、単純に自分は写真の現象が好きで実験をくり返して実体を見る状態までにしているだけ。いつまでたっても変わらない探究心に身の回りが答えてくれる、自分はその小さな合図を見逃さないように目を凝らして行きます。

田中さんの優しく、ご本人自身制作努力を惜しまない人柄であることを再認識させてくれたインタビューでした。お忙しい中お話をいただきありがとうございました！

NPO法人海賊船は世界の素朴な手作りのおもちゃの博物館「トイ・カルチャーミュージアム」と子どもの自由な物作りを応援する工房です。

施設内は手作りのおもちゃが数多く展示されており、子どもたちはそれから刺激を受け自分の好きな物作りをすることができます。工房では自分の作りたい物をどの素材で、どの様に作るのかを子どもたち自身で考え、実際に制作し、それにより得た「成功」「問題」が重要で、マニュアルがなくても自分で問題解決のできる【問題解決学習】を物作りから実践しています。

私が海賊船のスタッフとして働く事になったきっかけは学部生の時（'93年）に施設の移転作業を手伝った事からでした。

その当時の私は大学で彫刻制作をする事が全てで就職活動もしていませんでした。海賊船で働いたのも[物作りに関われるなら…]と言う単純な考え方からでした。

この仕事を長年続けているうちに子どもへの接し方や指導法を覚えてきました。援助者となり子どもたちと接し、反省的実践家として学び続ける者に育ててもらった気がします。これは学校の教員として子どもたちと関わる基礎となっています。

ある時【大学卒業後どうやって喰っていくのか?】と言う話題になり、ここで学んだ造形指導の経験を生かし自分で造形教室を開く事と美術講師になる事で彫刻をしながら生活するスタイルを作ったらどうかとアドバイスを受けました。

「彫刻ができるならそれでいいこう！」

即決していました。成功するかどうかわからないのに…若かったですね。しかし事を始める前に考えすぎると止まることがほとんど。今思えばその時の判断は自分が前に進む為にはよかったのだと思います。

今ではこれからの若い指導者を育成する事も重要な仕事になっています。将来自分で造形教室を開き、子どもたちと関わっていきたいと考えている方がいらっしゃいましたら、お気軽に海賊船までお問い合わせください。

また、是非一度日進市にあるNPO法人海賊船に遊びに来てください。

ブログにいろいろ書いていますが、現場を見てその場の空気を感じるのに勝るものはありません。

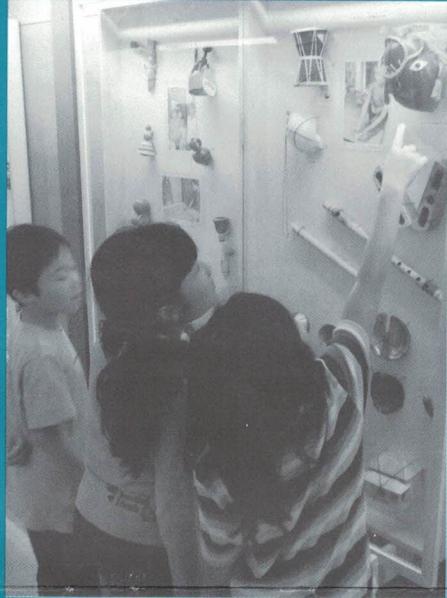
NPO法人海賊船 沿革

1977年工作学校海賊船として日進市でスタート、1993年子ども民俗館海賊船として愛西市に移転、2010年NPO法人海賊船の認可、現在に至る。

愛知県日進市折戸町枯木21番地87

0561-76-6879

URL <http://npokaizokusen.jp>



“人”とは言い切れない
“現象”を描く



笑顔が癒し

大門 弘尚さん

日本画専攻 24期卒

今回、地元奈良にて「社会福祉法人 史明会、障害者支援施設Voice・特別養護老人ホーム Lino」を開設、運営されている大門弘尚さんにお話を伺いました。

— ブログを見させていただきましたが、入居されている皆さんの笑顔がとても印象的で、活気を感じました。ところで、芸術大学を出られて大門さんが、社会福祉法人を立ち上げる事になったきっかけは何ですか？

もともと家業（製材業）の傍ら、父が障害者福祉施設を有志の方々と開設運営しておりました。大学卒業時は小生も製材業を継いでおりましたが、30歳の時に父が製材業を廃業し、個人で社福を立ち上げ障害者施設を運営したいと相談されたのが始まりです。前々から福祉業に専念したいと考えていた父の思いと、新しい事（製材業の下火で将来性が無い）に取り組んでみたかった私の思いもあり、一念発起ではじめました。法人設立から一年後に障害者支援施設voice（ボイス）を、4年後に特別養護老人ホームlino（リノ）を開園いたしました。

— 特別養護老人ホームとは、どのような施設なのですか？



基本的には介護度1～5の方がご利用いただける高齢者施設です。例外もあって、支援が無いと生活できない方、難病の方や身体障害をお持ちの方も市町村の許可があればご利用いただけます。また、当方はユニット型特別

養護老人ホームとして、全室個室で10名程度のグループ単位で生活していただいている。プライバシーに配慮し、個々の生活スタイルを維持し時間にとらわれることなく安心安全に注力した施設です。

— よく聞く言葉ではあるけれども内容は意外と知られてませんよね。施設を立ち上げるにあたって、どのような苦労や喜びがありましたか？

どんな商売（事業）も同じだと思いますが資金の調達は言うに及ばず、近隣の方々の理解協力があって初めて認可建設できます。地域性にもよると思いますが、奈良県は保守的な地域柄で近隣の理解を得るには苦慮いたしました。まだまだ苦労話は多すぎて語りきれませんが、私の喜びはご利用者様が楽しく生活でき、ご家族様の笑顔が見られることです。そして、それらに癒されます。経営する立場としては職員が日々元気良く出勤してくれることが一番の喜びです。職員が100名近くなると名前を覚えられませんが…（苦笑）

— 想像できない問題が多くありますね。でもやはり笑顔が1番のエネルギー源ですね。お話を伺いながらいろいろと考えさせられます。施設の開設から10年、日常や運営に関わって新たに見えてきたことは何かありますか？

新たに見えてきたことは特にありませんが、最近は職員の育成の難しさを痛感しています。人を育てる事は知識・技術・経験だけなら簡単ですが、福祉の仕事は心の成長が重要であり、心の成長は他者の促しから、如何に本人が気付き、改善し、実行できるかに掛かっています。促し方によっては、ただのクレームや批判に受け取られる場合があり、言葉の一つひとつに配慮してます。要は「気遣い・思いやり」で組織は廻ってますから！

— どんな仕事でもやはり、心の成長ありますね。私達も進歩、成長を意識し、まだまだという謙虚な気持ちをもって過ごしたいです。この度は、貴重なお話をありがとうございました。最後に大門さんの未来像をお聞かせください。

今後は障害者福祉をメインに運営していくと考えています。特養も半数は高齢障害者の方々で運営していく計画です。また年末には障害者専用グループホームをオープンしますし、45歳までに施設を数軒建設したいです。福祉以外の事業案件もあり忙しいですね！

大門さんの益々のご発展をお祈りしています。

ホームページURL

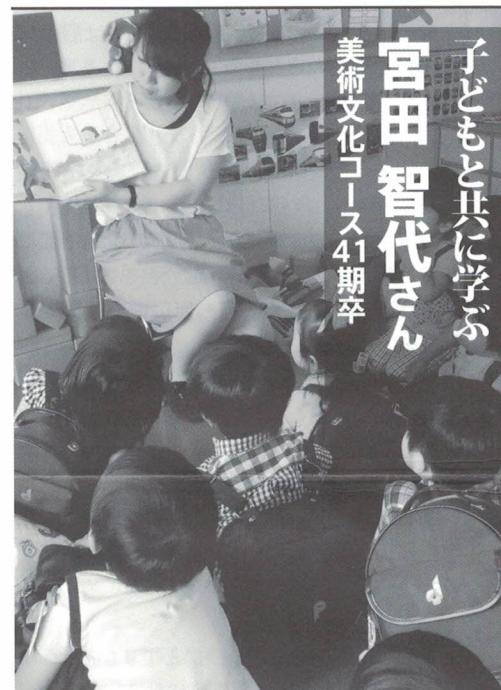
<http://d.hatena.ne.jp/simeikailino/>



犬飼 真弓さん
洋画専攻 37期卒

— 在学中から、ギャラリーで個展をしていましたが、どのような変化がありましたか？

在学中は展示させて頂いてるスペースの常連さんが立ち寄って観る、という印象を持っていたのですが、最近だと、名芸の学生さんが観に来て下さっています。大学で先生方も応援して下さっていますし、卒業後も気に掛けて頂いて、有難い



子どもと共に学ぶ
宮田 智代さん
美術文化コース41期卒

美術文化コースを卒業した、宮田智代さん。彼女は、早くから子どもへの美術教育について興味を持って学んできました。そんな彼女の就職先は「河合塾学園ドルトンスクール」。幼児のうちから、子どもたちの個性や旺盛な探究心を育てる教育を実践するドルトンプランを基礎に多彩な領域を跨ぎながら生徒の能力を最大限に伸ばしていく取り組みを行なうスクールです。そんな環境の中での彼女の奮闘振りを伺います。

— お仕事を始めて、どうですか？

ここでお仕事をさせていただいて半年が過ぎま

限りです。学生時から続けて観ているという方もみえます。

——卒業後、作品制作に変化はありましたか？

環境的には、在学中は意見をくれる人が周りにいますし、有難いことに自分の進行具合や修正点が自然とわかりましたが、卒業後(家の単独制作)は目印となるものが何もなく、自分がどこに向かっているかわからなくなってしまった時期がありました。そういう環境変化から、「自分の軸の再確認・確立」を意識しながらも、沢山失敗をしました。改善策としては、考えをまとめるためのノート作りと、ダメ出しを貰う為に、作品を観てもらうようにしていました。

——在学中に制作への影響を受けた講義や先生はありますか？

これだけ、というわけではなく色々なもの積み重ねによると思うのですが、東洋・西洋学の神仏に対する概念は私の頭に残りました。私の描く人物は“現象”であり“人”とは言い切れないもの(性別の有無や、どこか人間らしくない等)を念頭において描いているのですが、その意識は卒業後制作を続けていくにつれ強くなったように思います。

したが、まだまだ毎日が忙しくあつという間に一日過ぎていって…でもバリバリ働いています！(笑)スクールではいろいろな立場で働いている方がいらっしゃいますが、私は教員採用で、ファーストプログラム所属で、ナーサリーという年少に当たる年齢の担任です。それから、金曜日の夕方はアフタースクール小学生のサイエンスの科目も担当しています。

——ファーストプログラム…？ナーサリー？

ファーストプログラムは3歳～5歳児が対象になります。ナーサリーは保育園・育児室という意味で、ここでは3歳児のクラスです。いろいろな活動をしますが例えば「ガーデンプレイ」では、外で思いっきり元気に身体を動かして遊びますし「プロジェクト」という授業では数日から数週間に渡って一つのテーマに沿って、多角的にアプローチしていきます。例えば「くだもの」であれば、切り口を観察したり、重さや、においはどうか？クッキングでジュースを作って飲んだり、色をよく見て絵を描いたりするんですよ。この授業は私自身も子ども達とともに、気付かなかつた沢山のことを学べるので興味深いです。

——やはりひとつひとつじっくり取り組む姿勢を感じますね。仕事をしながら、これは特徴的を感じることはありましたか？

一番感じたことは、子どもひとりひとりの個性と自由をとても大切にしています。知識を一方的に詰め込むのではなく、子どもたちが実際に行

——卒業後はギャラリーに所属していますが、どのようなギャラリーですか？

オーナーさんの考え方を取り扱い作家が少ないため、ギャラリーとの関係が親密なのかなと感じます。

——ギャラリーからアートフェアに出展していますが、どのようなことを経験しますか？

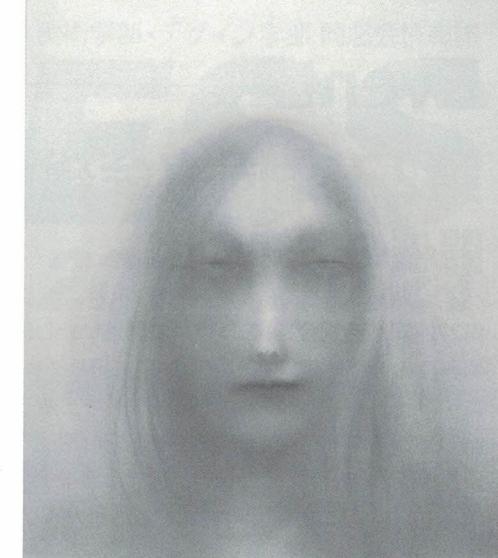
開催地で多くの方に観て貰えたりと受動的機会であることは勿論ですが、作家として、また技術において、自分に足りないものを再確認できる機会です。

——これからの目標をお願いします。

“描く”ということは、形はどうであれ幼いから生活の中に自然とありました。だからこそ、淡々と続けていってしまう事のないよう、自分で規則や目標などを積極的に持って、慢心することのないように取り組んでいきたいと思います。

——若くして作家としての活躍は素晴らしいですね、これからも卒業生に一言お願いします。

とても恐縮します。私よりも年下の若い作家



《山脈》1000×803mm 2012年

さん達がこれから次々と出てくるのだろうなと思うと、楽しみもあります。私も若い作家さん達から色々なことを学んで吸収していくたいと思っています。卒業後は慣れない生活の中で、制作を続けることが困難な場合もあると思いますが、制作の上に自分が成り立つ感覚を忘れないように、続けていって欲しいです。

今後もご活躍を期待しています。お話をありがとうございました――

動していく中で、発見をし、問題や疑問を解決していくといった、積極性を育てているところです。

もう一つの特徴は、ドルトンが独自に開発したプログラムを行う「ラボ」という授業があることです。少人数に分かれたグループでを行い、アイデアを考えたり、注意深く判断したり、推理するなどの5つの知的な働きと、「図形」「記号」「意味」という3つの知的な内容を組み合わせた教材を使って思考力や創造力を養うことができます。

それに授業後のアフタースクールではセレンディティプログラムというのもあって、私はアートとマジック(手品)を受け持っています。

——マジック？覚えたんですか？

子どもができるよう多少アレンジがしてあります、本格的なトランプマジックや消失マジックを覚えました。初めて披露したマジックに対して、子どもが「魔法」と信じて一生懸命に念じたり、驚いたりするのがとても新鮮です。そんな純真な心をもつて、不思議な現象に対して疑問をもち、自分なりに考えたユニークなトリックを生み出していくんです。手探りでマジックを再現していく過程の中で子ども達は新しい発見をしています。

——まさか就職してマジックを習得するとは想像もしませんでした。(笑)こうして生き生きとお仕事しているお話を伺えてとても嬉しいですね。

学生時代は「やりたい！」という気持ちで展覧

会で無茶をいったり、ワークショップで現実的に難しい企画を提案したりして先生方にはご迷惑をおかけしました。しかし、親身になってアドバイスや指導をしていただいたことで、どれも実現することができました。美文で学んだ「熱意もって最後まで取り組むこと」と前田先生から指導していただいた「先を見通して取り組むこと」は今も胸に刻んでこの仕事に臨んでいます。

——先日は子どもとアート、ものづくりがテーマのワークショップにも参加してらっしゃいました。今後もいろいろなチャレンジをしていくってられそうですね。

ドルトンではこれから運動会や、ハロウィン、文化祭など行事が沢山あるのでとても楽しみです。大学で学んだ制作能力を生かして、衣装のアイデアや小物の製作での子どもの表現に関われると良いなあと思います。

いつか自分でドルトンの先生と子ども全員で取り組むことの出来る、今までやったことのないような企画をしてみたいと思っています。これからも先生方からとことん学んで、子どもたちからも発見や刺激を受けながら、自分自身を磨いていきたいと思います。

学生時代からいつも一生懸命な宮田さん。子どもとのワークショップでも、届けなく一緒に楽しんでいる様子がとても印象に残っています。そんな彼女の魅力が仕事にも生きかされている、そう感じさせる今回の話でした。――

第27回 同窓会総会・懇親会 開催のお知らせ

第27回同窓会総会を、この11月に開催いたします。

今年度の会場は再度名古屋市池下に戻り、「ホテルルブラ王山」となります。

総会では昨年度の活動報告、これから活動予定、予算の収支報告といった、会員の皆様にとって大事な内容を議事運営しております。懇親会だけではなく、総会からご参加くださいますようお願い申し上げます。

総会後に行なわれます懇親会につきましては、会費無料(ご家族の方含む)でございます。

懐かしい先生方、ご友人との再会の場として、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

★2013年度の様子

参加してくださった主な先生方。



場所 HOTEL ルブラ王山

住所 〒461-8525

愛知県名古屋市千種区覚王山通8-18

電話 052-762-3151

会場ホームページ <http://www.rubura.org/>

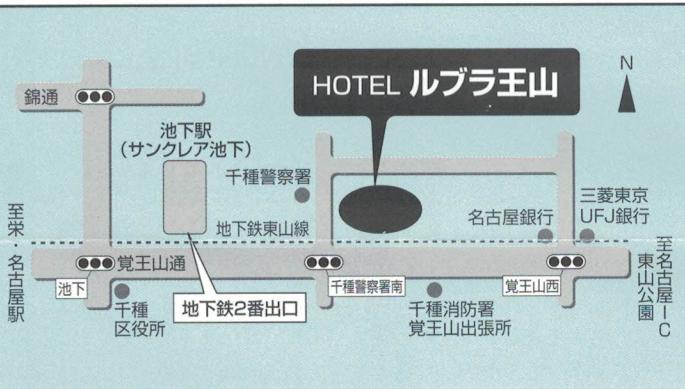
日時 平成26年11月16日(日)

総会 15:00より 2階 千成の間にて / 受付は14:30より

総会終了後、懇親会を行います / 会費無料

※駐車場はございますが、すべて有料です。

懇親会のお料理にはアルコールが使用してある場合がございます。
お車でのご来場は、ご遠慮ください。



記事へのお問い合わせは…

〒481-8535

愛知県北名古屋市徳重西沼65

名古屋芸術大学西キャンパス内

美術学部・デザイン学部同窓会事務局 宛

tel. 0568-24-0325(大学代表)

fax. 0568-24-0326

評議員	監査委員	理事	副会長	会長															
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	----	----	----	----	----	----	----	-----	----

41期	39期	38期	37期	37期	36期	35期	33期	28期	28期	28期	27期	22期	22期	4期	4期	4期	23期	22期	21期	12期	20期	23期	20期	19期	5期	20期	19期	4期				
デザイン	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	彫刻	洋画	日本画	洋画	日本画	日本画	デザイン	デザイン	デザイン	日本画	日本画	洋画	洋画	洋画	洋画	洋画	洋画	デザイン							
デザイン	アートクリエイティブ	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	彫刻	洋画	日本画	洋画	日本画	日本画	デザイン	デザイン	デザイン	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	デザイン						
佐竹アキラ	岡本透香	川口聖生	磯部絢子	水野愛弓	中村朋恵	永田敦子	福本百恵	長谷川基子	佐竹アキラ	鎌田桂太郎	小竹陽子	鈴木琢磨	加藤忠芳	中島弘敬	平田俊也	浜辺由美	小林聖知	鈴木淳子	永井瀧登	荒木紀江	福海幸雄	岡本昌子	中村恵美子	石川重明	杉浦尚史	岩井義尚	芳賀基純	平田隆宏	青木高弘	青木高弘		

◆27年間の長きに渡って理事事を務めてくださった、日本画5期卒の白井久義さんが退任されました。同窓会設立当時から今までご尽力いただき誠にありがとうございました。本当にお疲れさまでした。

同窓会役員紹介